

# 人と水の物語

## 和みの水

芹川

芹川の今日の姿は、彦根城や城下町の建設にともなう川の付け替え工事によって生まれたものです。いいかえれば、およそ400年にわたって彦根の人々に愛され、親しまれた川といえるでしょう。



市民のやすらぎの  
散策コース、  
「けやきみち」。

芹橋から琵琶湖岸までの約2kmの芹川堤防には、ケヤキ、サクラ、エノキなど、約220本の樹木がならび、ロマンチックな並木を形づくっています。これは、川の付け替え工事を行った際に、掘った土で築いた土堤が崩壊するのを防ぐために植えられたものです。したがって、樹木のなかには樹齢400年に近い古木が、今でも堤にしつかりと根を下ろしています。また、芹川の風景は、新湖国百景に選ばれた場所でもあり、四季を通じ、市民のくつろぎの散歩道として広く愛されています。



湖国に春を告げる  
小アユ釣り。

満開のサクラ並木の下を芹川に沿って歩いてみると、小アユ釣りを楽しむ人の姿を目にします。初春に川を遡上する小アユは、しょう油と水あめで炊かれ、つくだ煮として食卓にのびります。古くからアユは琵琶湖の「イワシ」とも呼ばれ、今日でも代表的な湖魚です。昔ながらの郷土料理の食材を絶やさないう自然環境を守り抜くことも、もうひとつの食文化といえるかもしれません。



15年にわたって親しまれた  
手作りイベント  
「環境フェスティバル」

彦根市では年1回、市民団体の主催によって快適な環境づくりを考える手づくりのイベント「環境フェスティバル」が開催されています。その事務局が設置されている彦根市役所の生活環境課を訪ね、担当の徳村朋子さんにお話をうかがいました。



彦根市役所生活環境課  
徳村朋子さん



「環境フェスティバル」は、昨年で15回目を迎えた歴史のあるイベントです。スタートした当初は、芹川を会場に魚のつかみ取りなどの催し物で盛り上がり、市民の方々に親しまれていました。回を重ねるごとに内容も充実し、現在では展示等も行われ、空・水・緑・自然とともにというテーマにふさわしく、楽しさとともに環境に関する知識を学べる催しとなっています。昨年までは「快適環境づくりをすすめる会」という市民団体の主催で、市内の子供会やPTA、消費学習研究会、J・A女性部、青年会議所、商工会議所等、22の団体ならびに生活環境課等の行政や企業も参加して開催されてきました。今年、より多くの市民団体やボランティア団体の参加を募るとともに、団体どうしのヨコのつながりを重視して、市民がアイデアを出し合いながら、自ら企画・運営していくイベントにしようと考えています。催事名称も「エコフェスタ」に改め、会場についても広場やホールを活用できる場所での開催を予定。およそ半年先ですが、11月頃の開催日に向けて着々と準備を進めています。これまでも増して、より多くの市民の方々の参加をお待ちしています。